

## 特集「編集委員今年の抱負 2017」にあたって

山川 宏

(編集委員長, 株式会社ドワンゴ)

本会誌をご購読中の皆様, あけましておめでとうございます. 人工知能の学会誌では, 2005年から奇数年の元旦に, 日頃, 基本的にはボランティアとして編集委員の活動を支えていただいている皆様に, 各自の抱負などを短い文章の中に凝縮して執筆いただく特集を継続してきており, 今回で7回目となります.

これまでの流れを振り返ってみますと以下のようです.

1. 2005年5月号 堀浩一委員長 23編, 24頁  
特集:「ようこそ人工知能の世界へ:編集委員今年の初夢」
2. 2007年1月号 西田豊明委員長 39編, 40頁  
特集:「編集委員2007年の抱負」
3. 2009年1月号 山口高平委員長 41編, 42頁  
特集:「編集委員今年の抱負2009:経糸から横糸まで」
4. 2011年1月号 松原仁委員長 40編, 41頁  
特集:「編集委員今年の抱負2011」
5. 2013年1月号 松尾豊委員長 40編, 41頁  
特集:「編集委員今年の抱負2013」
6. 2015年1月号 栗原聡委員長 29編, 37頁  
特集:「編集委員会企画—社会とAIの羅針盤2015—」

2017年現在における編集委員は, 委員長・副委員長のほかにシニア委員8名, 委員31名, 学生員12名の総勢53名で構成されており, 今回も34編をご寄稿いただきました. まさに今日の人工知能研究に関わっている方々となります. 新年にあたり本特集記事をお読みいただくことで, これら個性豊かな委員の皆様のホットな考えや思いに触れることができ, 人工知能の現在から未来に向けて多角的に考えるキッカケが得られるのではないのでしょうか.

この機会に, 編集委員会における委員の皆様の活動について簡単に紹介させていただければと思います. 編集委員会の主なミッションは, 学会の主要な出版物である, 論文誌と本学会誌「人工知能」と発行を隔月に行うための編集であり, これらを学会事務局の支援を受けながら進めています.

論文誌は, 隔月にてオンライン上で発行されており (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/tjsai/>), 原著論文としてはコンセプト論文, 技術論文, 実践AIシス

テム論文の種類があり, その他に, 萌芽論文と速報論文があります. 著者より学会に投稿された論文は, 基本的には編集委員の何れかの方にご担当いただき, その担当委員が依頼した複数の査読者に対して査読をお願いします. 担当となった編集委員は著者と査読者の間に立ちつつ, 査読の運用を管理しますが, 最終判断は適宜, 毎月行われる編集委員会での審議に委ねられます. さらに, 各年に投稿された論文の中から5%以内の優秀な論文に対して論文賞が選出されますが, この選定においても委員の皆様のご協力を得ています (2016年の論文賞選定から, 候補論文の推薦プロセスをWeb化しました).

各編集委員の任期は二年間を二期で, 通常4年となっており, この間に学会誌上において何らかの特集企画をご担当いただいております. ただ特集を含むさまざまな記事は必ずしも委員からの提案だけではなく, 多くの皆様から, 学会事務局や委員長への問合せが起点となることも多くなっています.

また編集委員会の皆様には, 数名のチームにより, さまざまな担務も担っていただいております. さまざまな運営を進める担務としては, 企画局, 広報局, アーカイブ, 論文誌管理, NGC連携があります. また, 個別記事担務としては, 表紙, レクチャーシリーズ, 私のブックマーク, グローバル・アイ, ショートショート (Vol. 31, No. 6をもって休載), 会議報告, 書評, 文献紹介, 博士論文, 大会合同研究会連携があります. また学生委員には, 学生フォーラムの記事を担当いただくほか, 毎月の編集委員会における書記担当としても活躍いただいております.

会誌は, 会員の皆様に郵送されるほか, Amazonや一部の書店でも販売しており, 毎号一部の記事は無料公開されており, それらはAI書庫 (<https://jsai.ixsq.nii.ac.jp/>) にて閲覧することができます.

なお, 本文の執筆にあたりCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) にアーカイブされた過去の記事にアクセスしてみました. すると, 今見返すことで, 新たな面白さを感じる記事もあります. 例えば最近研究が活性化している人狼知能にもつながり得る「AIもズルや言い訳に熟達すべきか?」という2007年の山口智浩元委員の記事や, 人工知能の進歩で人が働くことの意味が変わりつつある近未来を予見するような2009年の高山泰博元委員による「『智』を楽しむための技術」などが目につきました.

最後になりますが、人工知能分野は一昨年からの第三次ブームを超えても、その発展は留まる様子はなく、今年はさらに人々の生活に浸透していくと思います。

10年一昔ならぬ、3か月一昔という表現でWebイヤーという言葉をよく耳にしたのはもう15年ほど前になるかと思いますが、最近の間隔では皆様はどのぐらい速度感を感じておられるでしょうか。会誌編集の都合上、委

員の皆様には2か月前に原稿を書いていただいているので、もしかすると読者がこの記事を目にした頃には違う抱負を考えているということもあり得ます。しかし、委員の皆様のお考えを、ある時点でのスナップショットとして見ていただくことは、読者にとっても興味深い体験になると期待しています。